

図書紹介

『教育学のすすめ』
（水内 宏著 一藝社）

山 口 道 宏

1 断わっておくが私の専門は教育学ではない。よって本コーナーの担当としては役不足かもしれない。ましてや本書の著者は我が国の教育学の権威として知られる。が、人となりには権力をことさら嫌い謙虚そのもので、今回の著書紹介のご返事にも当初は強く固辞。編集委員長としてようやく説得に奏功すると、気がついたら私がその大任を仰せつかったという次第である。

2 本書は著者の大学教員生活 50 年目の節目に上梓された。いわばそのままに我が国の教育学 50 年史とっていい。専門の教育課程論や学校改革論はもとより、その長きに亘る研究に根差す姿勢と視座にふれて、私自身が背筋を糺すことだった。本書は読者にとっては待望の「教育学原論」か、もうひとつの「教育哲学」というほうが相応しい。『教育学のすすめ』は著者自身の真摯な研究成果の集大成。刊行日の 8 月 6 日は広島原爆投下の日でもあった。

「まえがき」の一部を引いてみよう。

「教育学のわかりやすい入門書を書き、学生・大学院生、一般市民や各界の皆さんに教育学の面白さを味わってもらいたい」と思い、本書を書き上げました。大学や勉強会等でのテキストとして、あるいは教養書として、広く活用されることを願っています。教育学は、理論として自己完結する努力を続けるとともに、もっと市民化・大衆化される必要があります。本書をもとに、生活拠点や各方面での活発な教育論議や対話の高まりを期待しています。(略)

本書は、千葉県教育文化研究センターの編集・発行による季刊『ちば・教育と文化』誌（現在は年 2 回刊）からの依頼に端を発した連載に拠っています。研究センター（個人会員制）は、臨時教育審議会（臨教審、1984～87 年に 4 回の答申。会長は当時の中曽根康弘首相）による国家主導型の「教育改革」の動きの中で、市民・国民レベルからの教育改革が必要だということで 1984 年に創設され、季刊の研究誌・教育と文化の総合誌『ちば・教育と文化』を刊行します。水内は、「これからは千葉地方区の仕事に埋没する」と宣言して、創刊から 10 年間、「千葉と日本と世界を串刺しにして捉えるような社会認識を」の念を胸に編集長として全力投球をしました。本書全 13 章は任期を全うしたのちのささやかな成果の一部です。」

3 本書は、全13章とも一話完結スタイルだから、どの章から読んでもいい構成になっている。著者が現在勤務する星槎大学との出会いと関わりについては「第11章 学校制度を考える」のなかで、次の紹介がある（「平均年齢36歳・学部生、45歳・大学院生の大学で働く」より）。

「学びたいと思った時に学びの機会が保障される制度に、働きかつ学ぶをキーワードに中学卒以降の大胆な改革を」「働きながら学ぶではなく、働き、かつ、学ぶが重要だ。『ながら』では、学ぶが労働に従属的・副次的位置になってしまう。労働と学習それぞれの十全な展開と両立が果たされようになければならない。雇用者側にも当然両立に必要な配慮と手立てが求められねばならない……」。

思わず膝を打った。著者は星槎大学共生科学部教授とともに星槎大学大学院教育学研究科長も務める。

さて、私が教育学の門外漢とはいえ、現下の揺れ動く文科行政の動向に関心がないわけではない。批判を恐れずにいえば、我が国の教育行政は「管理」「画一化」が進んでいないか。現場が哭いている。そんな時代だからこそ、ブレることなき〈教育学の原点〉に立脚することが肝要といえよう。

本書は教職を目指す学生はもとより、その行間からは、私たち後進にもそもそも「市民にとって、国民にとって、教育とはなにか」を問う。多くの人に一読を勧めたい。

目次

- 第1章 子ども学としての教育学
- 第2章 公教育の思想に学ぶ 1
- 第3章 公教育の思想に学ぶ 2
- 第4章 子どもの発達に迫る 1
- 第5章 子どもの発達に迫る 2／発達のすじみちをどうとらえるか
- 第6章 子どもの発達に迫る 3／あそびの発達の意義とあそびの発達過程
- 第7章 こどもの発達に迫る 4／子ども知的・人格的発達と言語
- 第8章 補遺 生きることから
- 第9章 あらためて考える 学力とはなにか？ 1
- 第10章 あらためて考える 学力とはなにか？ 2／社会の中の学力 能力主義の教育と学力
- 第11章 学校制度を考える 1／学びたいと思った時に学びの機会が保障される制度に働きかつ学ぶをキーワードに中学卒以降の大胆な改革を
- 第12章 学校制度を考える 2／学校制度の基本問題
- 第13章 道徳性の発達をどう引き出すか